

ふたば未来学園中高一貫教育 最終まとめ

平成29年10月

ふたば未来学園中高一貫教育検討協議会

I はじめに

平成27年7月、県教育委員会は「福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校（仮称）基本計画」（以下「基本計画」という。）を策定し、学校施設等の整備に向けた準備を進めてきたが、ふたば未来学園高等学校に併設する中学校についてはアウトラインを示すにとどまっていた。そのため、基本計画における「併設中学校の教育方針」に基づき、併設中学校の教育方針に関する事項、教育方針を踏まえた教育内容等に関する事項、その他、関連する事項の検討が必要となった。県教育委員会は、これらの事項について検討するため、文部科学省教育制度改革担当者、大学関係者、市町村教育長代表者、福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会*1代表者、県小中学校長会代表者、PTA代表者、県教育委員会関係者等を構成委員として本協議会を設置した。

これまで、平成28年8月から平成29年10月までに6回の会議を開催し、基本計画や現在のふたば未来学園高等学校における教育実践を踏まえ、双葉郡子供未来会議*2での小学生の意見等を参考にしながら、併設型中高一貫教育の柱や具体的な教育内容、その他、関係する諸事項について検討を重ねてきた。本まとめは、これまで本協議会が検討してきた、ふたば未来学園における併設型中高一貫教育の概要について整理したものである。

II 基本計画の概要について

平成27年7月に策定した基本計画の概要は、以下のとおりである。

1 併設中学校の概要について

(1) 学校名

福島県立ふたば未来学園中学校（仮称）

(2) 設置年月

平成31年4月

(3) 設置地（計画場所）*3

本設校舎 双葉郡広野町中央台一丁目地内

寄宿舎 双葉郡広野町下北迫字折返地内

*1 福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会

「福島県双葉郡教育復興ビジョン」は、震災後の子どもたちの学びを守り、未来を生きる強さを持った人材に育てることを目指し、平成25年に双葉郡8町村の教育長を中心に取りまとめられた。文部科学省や復興庁、福島県教育委員会、福島大学等の協力のもと協議会を立ち上げ、学校や地域と協働してビジョンの具現化を進めている。

*2 双葉郡子供未来会議

平成25年3月から県教育委員会と福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会により行われてきた双葉郡内の小・中・高校生による会議。平成29年9月には「自分たちの理想の中学校」をテーマに話し合い、提案が出された。

*3 基本計画においては、設置地は本校舎についてのみが示されていたが、その後新たに寄宿舎について計画されたので追加した。

(4) 募集定員

1 学年 60 名

2 教育目標について

(1) 学園の目標

新しい生き方、新しい社会の建設を目指し、グローバルな視点でこれまでの価値観、社会のあり方を根本から見直し、地域や世界を舞台にして、自らを変革し、社会を変革していく「変革者」を育成する。

(2) 併設中学校の教育方針

グローバルな視点で地域や世界で活躍するリーダーの育成を目指す。*4

(3) 学園で育む資質・能力

- どんなに困難な問題に対しても、論理的思考力、課題発見・解決力、強い志と使命感を持って、何度失敗しても挑戦し続ける「主体性」
- 異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築し多様な主体と共に力を合わせる「協働性」
- 新しい生き方、産業、社会をつくりだしていく「創造性」

(4) 目指す学園像

- 生徒が主体的に動く学園
- 失敗を恐れず困難な課題に挑戦する生徒を支え、応援する学園
- 現実社会の中で学ぶ学園
- 地域・コミュニティや世界と共に学ぶ学園
- 夢を開く窓がたくさんある学園

3 中高一貫教育の実施形態

併設型中高一貫教育及び双葉郡 8 町村の各中学校との連携型中高一貫教育*5

*4 基本計画においては「グローバルな視点で地域や世界で活躍するリーダーとアスリートの育成を目指す。」としていたが、平成29年3月に策定された双葉地区未来創造型リーダー育成構想（14ページ*27参照）においては、「リーダー」には「アスリート」も含んでいると整理されたため、修正した。

*5 基本計画においては「併設型中高一貫教育及び双葉郡 8 町村の既存の中学校との連携型中高一貫教育」としていたが、今後の 8 町村の中学校の新設等も視野に入れるため、修正した。

Ⅲ ふたば未来学園中高一貫教育について

1 ふたば未来学園中高一貫教育の柱について

東日本大震災及び東京電力福島第一原子力発電所事故により深刻な影響を受けた双葉郡では、災害からの復興を担う人材育成が求められている。同時に、地域復興の使命感に満ちた生徒も少なくない。双葉郡では、震災及び原発事故を契機に、少子化・高齢化、過疎化等が急激に進み、地域コミュニティの崩壊、分断と対立、差別や偏見などの問題も顕在化している。これらの課題は全国ひいては世界が直面する課題でもある。言い換えれば、双葉郡は世界の「課題先進地域」でもあり、この地域だからこそ、困難な課題に挑戦し、地域や世界で活躍できる、レジリエンス*6を持ったリーダーの育成が必要であり、可能でもあると考える。将来、様々な場面においてリーダーシップを発揮し活躍する人材を育成するには、6年間を通じた最先端のカリキュラムの中で、主体的・対話的で深い学びにより、グローバルな視点と、社会の形成者としての資質を育む必要がある。

ふたば未来学園では、学園の目標として「変革者」の育成を掲げており、それに向けて「主体性」・「協働性」・「創造性」等の資質・能力を育むことが重要である。そのために、「主体的・対話的で深い学び」、「グローバル教育」及び「シティズンシップ教育」の3つをふたば未来学園中高一貫教育の柱として掲げ、「現実社会の課題解決学習」に取り組ませていく。

「主体的・対話的で深い学び」とは、いわゆるアクティブ・ラーニング*7の視点による質の高い学びにより、地域や世界で活躍するリーダーに必要な知識や技能を確実に身に付け、思考力・判断力・表現力を育み、学びに向かう力、人間性等を培う教育である。

「グローバル教育」とは、持続可能な社会の実現のために、地域に軸足を置き、もう片方の足で世界に踏み出し、地域の抱えるグローバルな課題に向き合い、解決する能力を育む教育である。

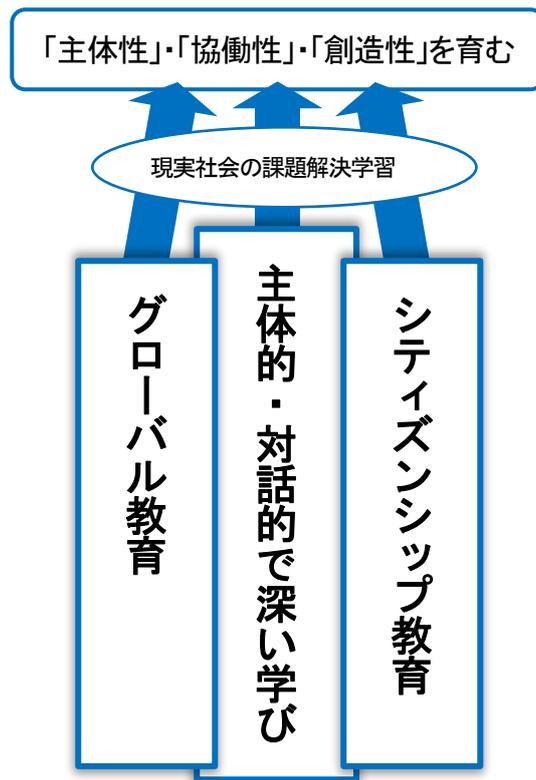
「シティズンシップ教育」とは、地域の課題に向き合いながら、社会の形成者に必要な資質や能力及び、能動的な市民としての主権者意識、市民性、人権感覚を育む教育である。

*6 レジリエンス

逆境や困難などに直面した際の「ストレス耐性」「折れない心」などの意味である。

*7 アクティブ・ラーニング

教員による一方的な講義形式の教育とは異なり、学習者が課題の発見・解決に向けて能動的に学ぶ指導・学習法の総称。



「主体性」・「協働性」・「創造性」を育むための
ふたば未来学園中高一貫教育の柱

2 教育内容について

ふたば未来学園中高一貫教育の3つの柱である「主体的・対話的で深い学び」や「グローバル教育」、「シティズンシップ教育」はそれぞれ個別なものではなく、相互に関連し合うものである。

具体的には、総合的な学習の時間「未来創造学」*8を中高一貫のカリキュラムの中心と位置づけ、総合的な学習の時間や全ての教科、特別の教科道徳、特別活動の横断的なつながりの中で展開していく。

このことから、「未来創造学」及び、ふたば未来学園中高一貫教育の3つの柱について、中学校段階での教育内容を以下のように整理した。

未来創造学

「未来創造学」及び全ての教科、特別の教科道徳、特別活動の横断的なつながりの中

*8 未来創造学

ふたば未来学園高等学校では総合的な学習の時間等において「未来創造探究」として、グローバルな視点から地域課題の解決に向けての取組や提言を行っている。中高一貫の学びの連続性を考慮し、中学校における探究の取組は「未来創造学」と称する。

で、「防災教育・放射線教育・環境教育等」や「学び方を身に付けるスキル学習」、「哲学・熟議」、「演劇」、「リーダー学」、「ふくしまに向き合う学び」に取り組みせるとともに、グループ及び個人による探究により、グローバルな視点から地域課題の解決、地域再生の実践を行わせる。探究については、1年次は地域について学び地域の課題を発見する、2年次はグループ研究に取り組み、3年次は個人研究によりまとめるなど、生徒が主体的に活動する指導計画を、学年に応じて設定する。

高等学校における「未来創造探究」に螺旋的に発展させられるよう展開するとともに、連携中学校との相互交流により更なる高まりを目指す。

(1) 主体的・対話的で深い学び

教科横断的な学習である「未来創造学」や、各教科での学習を通して、習得・活用・探究という学習サイクルの確立を図る。習得した知識、概念や思考力等を活用しながら、課題の設定、情報の収集、整理・分析、まとめ・表現等の探究的なプロセスを通して、さらに深い知識、概念や思考力等を習得させ、学びを深める力を育てる。これらの学びは6年間の中高一貫教育の中心となる柱であり、「グローバル教育」や「シティズンシップ教育」とも深く関わるものである。

ア 基礎を固め、深い学びにつなげる国語・数学

国語科及び数学科の通常の学習に加え、学習指導要領で示された標準時数より多くの授業時数を確保し、基礎の着実な定着を図る。これにより、国語科においては、PISA^{*9}型の読解力を身に付けさせるとともに、数学科においては、数学的な見方・考え方を豊かにし、体系的に考える力を育成するなど、深い学びにつなげる。

イ 競技力向上と生涯スポーツに関する学習

学校設定教科としてスポーツ科（仮称）を設け、バドミントンやレスリングに関する専門的内容及び生涯を通してのスポーツとの関わりなどを学習させる。

ウ 防災教育・放射線教育・環境教育等

東日本大震災の教訓を生かし、自然環境や社会環境との関わりを視点に据えた循環型社会の創造を目指した学習を行わせる。地震・津波・原子力災害等からの防災について探究する「防災教育」や、原子力災害や放射線等について理解を深める「放射線教育」、地球温暖化問題とエネルギー問題等への理解を深める「環境教育」等、新たな地域・社会について生徒自身が探究する学びを行わせる。

*9 PISA (Programme for International Student Assessment)

15歳の生徒が持っている知識や技能を、実生活の様々な場面で直面する課題にどの程度活用できるかを評価する、OECD（経済協力開発機構）が進める国際的な学習到達度調査の略語である。

エ 学び方を身に付けるスキル学習

探究的な学習を進め、多様な価値観を理解し共存を図るために必要な知識やスキルを身に付けさせる。

(2) グローバル教育

ア 英語力を高め、様々な課題を解決する学習

学校設定教科としてグローバル・スタディ科（仮称）を設け、外国語によるコミュニケーション能力を高めるとともに、グローバルな課題に関する学習を通して、より実践的な英語力の育成を目指す。

そのために、CLIL*10を意識した学習として、未来創造学や各教科で学習した内容について英語で相互に伝え合ったり、議論したりするなどの活動に取り組みさせる。授業においては、ALT*11の活用により「実際に英語を使う場面」を意識した活動を行わせるとともに、中・高校の教員によるTT*12により、習熟度別学習の展開（基礎の定着、発展的な学習への対応）を図る。（高校1年までにCEFR-A2レベル*13・英検準2級相当を目標にする。）

[取組の具体例]

訪問を予定している海外の学校とオンライン授業を行い、コミュニケーションの意欲とスキルを高めるなど、関連する学習をグローバル・スタディ科の中に組み込む他、双葉郡8町村の小中学校で行われている「グローバル人材を育む小中連携英語教育推進事業」との連携なども考えられる。

イ 国内研修

国内の様々な地域や機関、施設等における研修を通して、英語コミュニケーション能力を身に付けさせるとともに、グローバルな見方や考え方を養う。

[取組の具体例]

英語の活用力をみながく研修や、青年海外協力隊員の任務や志を理解させるための

*10 CLIL (Content and Language Integrated Learning)

内容（他教科等の学習内容）と言語（英語）の両方を学ぶ教育方法である「内容言語統合型学習」の略語である。

*11 ALT (Assistant Language Teacher)

「外国語指導助手」の略語。

*12 TT (Team Teaching)

複数の教員が協力して授業を行う指導方法。

*13 CEFR (Common European Framework of Reference for Languages)

外国語運用能力の評価等のために、2001年に欧州評議会が発表した「ヨーロッパ言語共通参照枠」の略語である。A2レベルは、身近で日常の事柄について、文やよく使われる表現が理解でき、単純で直接的な情報交換に応じることができるレベルであり、英検準2級（高校中級レベル）に相当する。

合同ワークショップ*14が考えられる。また、持続可能な地域づくりを目指している国内先進地域の訪問や、各地域のリーダーと交流し、双葉郡の復興を発信していく取組なども考えられる。

ウ 海外研修

中学校段階から英語による議論に挑む機会を作っていくことは重要である。海外を訪問して同世代と交流させるほか、多文化主義、環境問題への取組等の問題解決型学習を展開し、地域課題解決に向けた取組やお互いの学習の成果について発表させる。その活動の中で、グローバルな視点による思考力と、他者を巻き込もうとする意欲を培うとともに、多様性を受容する態度を育む。

[取組の具体例]

グローバル教育の柱として研修旅行を設定し、高等学校や他の中学校で実施している研修旅行と連携することなども考えられる。

(3) シティズンシップ教育

ア 哲学・熟議

ものごとの本質をつきつめる哲学対話や、意見が分かれるようなテーマについて一致点を見いだしていく熟議等を通して、価値の多様性を学ばせるとともに考える力を育む。

[取組の具体例]

「友情と愛」、「生と死」、「権利と責任」のような日常生活に関連するテーマや地域課題に関するテーマについて話し合い、その本質を突き詰めたり、立場の違いによって対立するテーマについての話し合いを通して、対立点を明確化し、お互いの立場への理解を深め、一致点を探る活動等が考えられる。

イ 演劇

演劇のワークショップなどを通して、コミュニケーション力を育む。

[取組の具体例]

信頼関係を作る活動や体を使った表現、演劇における場面設定や心情の動きを体感するワークショップ等を通して、表現力やコミュニケーション力を育む学習などが考えられる。

ウ リーダー学

生き様や社会に貢献する姿勢、価値観の異なる他者との対峙やその克服体験につい

*14 ワークショップ

参加者全員が、体験を通して学びや創造、問題解決やトレーニングを行う手法。

て、地域や世界で活躍する各界の「変革者」から学ぶ場を設定することにより、志を果たそうとする使命感と、多様な価値を受容する寛容性を育み、リーダーとしての資質を高める。

[取組の具体例]

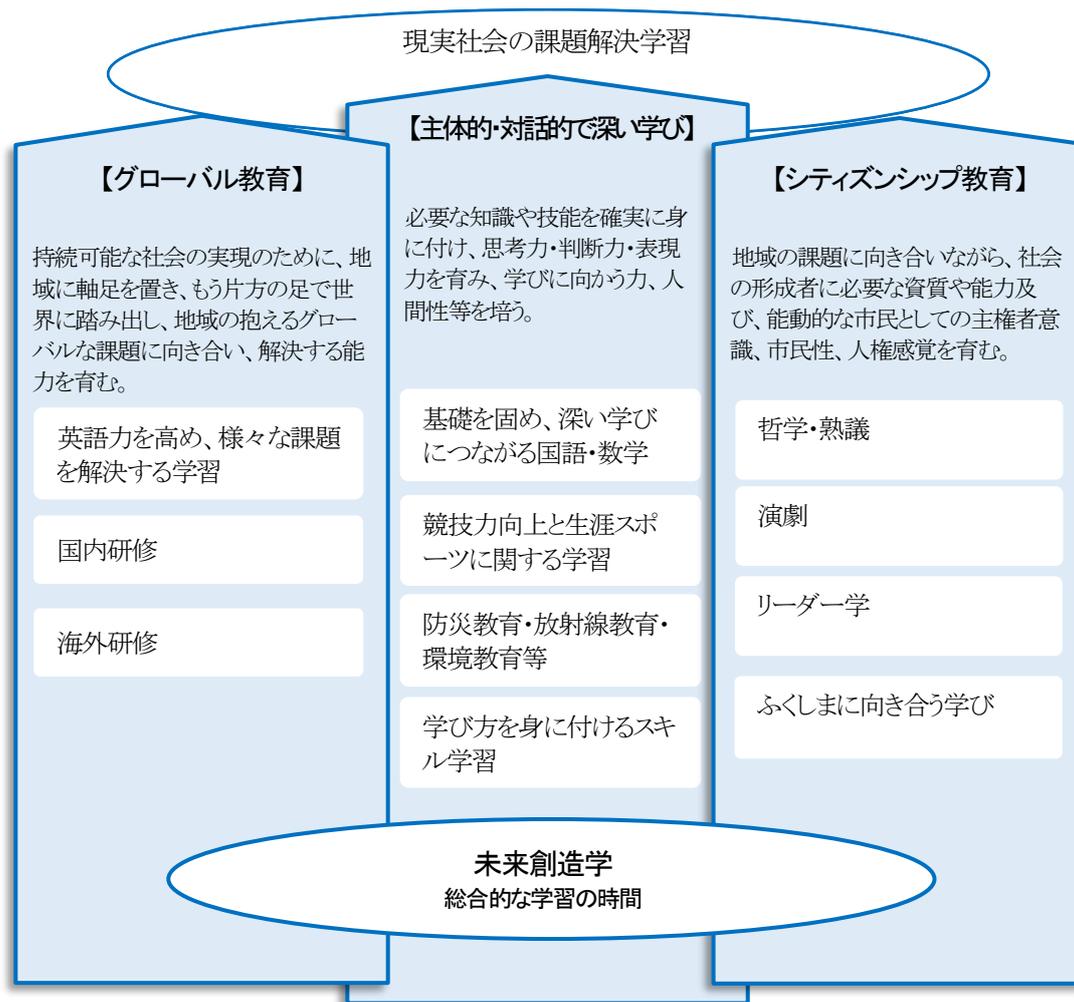
各界の「変革者」を講師として招へいし、小グループに分かれて講師等と対話を行うことなどが考えられる。

エ ふくしまに向き合う学び

双葉郡8町村の教育の根幹として取り組んでいる「ふるさと創造学」の一環として、地域の歴史・伝統・文化や地域課題を学ぶ機会を設定し、双葉郡を知るための学習を行わせる。また、双葉郡の学びを通して、福島県内全域にも関心を向けさせる。

[取組の具体例]

地域復興に携わる方の講義や、フィールドワークによる地域課題の発見により、双葉郡について知り、その後の探究のための課題設定につながる取組などが考えられる。



ふたば未来学園中高一貫教育の柱と教育内容のイメージ

3 教育方法について

「変革者」に必要な「主体性」・「協働性」・「創造性」等の資質や能力を育むために、各教科や総合的な学習の時間、特別活動、特別な教科道徳等における教育内容を、どのように取り組み実践していくかという観点から、教育方法として次のように整理した。

(1) 未来創造学を中心としたカリキュラム・マネジメント*15

中高一貫教育で育む汎用的な資質や能力を、教職員や生徒によりルーブリック*16として設定し、その育成のために、各教科学習や特別活動等、学校の教育活動全体を計画し、未来創造学を中心とした特色ある教育課程で学習を構造化する。また、この教育課程において「現実社会の課題解決学習」に取り組ませていくためには、教材の魅力化を図りながら内容を精選し、生徒の学ぶ意欲が一層高まるよう留意しなければならない。

ふたば未来学園におけるカリキュラム・マネジメントの手法を県内外に広く普及させ、県内各校のカリキュラム研究開発に対して支援や情報提供を行うなどのセンター的機能をふたば未来学園が果たすようにする。

(2) 多様な機関や団体等と連携した教育活動

多様な機関や団体等と連携した教育活動を実施することにより、大きな効果が期待できる。

ア 連携中学校との連携

双葉郡の町村立中学校との諸活動を通して連携を深めていく。

- ・ふるさと創造学サミット*17、中高交流会*18、合同生徒会等
- ・日常の授業や部活動での連携
- ・連携中学校への出前授業等

*15 カリキュラム・マネジメント

生徒たちの姿や地域の実情等を踏まえて、各学校が設定する教育目標を実現するために、学習指導要領等に基づき教育課程を編成し、それを実施・評価し改善していくこと。

*16 ルーブリック

成功の度合いを示す数レベル程度の尺度と、それぞれのレベルに対応するパフォーマンスの特徴を示した記述語（評価規準）からなる評価基準表である。

*17 ふるさと創造学サミット

福島県双葉郡教育復興ビジョンに基づく郡内共通の探究的な取組である「ふるさと創造学」に関する、各校が一堂に会した発表会。

*18 中高交流会

福島県双葉郡教育復興ビジョンの掲げる教育による絆づくりの取組の1つとして、町村や世代の垣根を越えてつながることをねらいに、郡内の中学生と高校生を対象とした体験型の学習会。

イ 大学との連携

生徒が大学生からアドバイスを受けることや大学レベルの教育に触れる機会を拡大し、生徒一人一人の能力を伸ばす。

- ・大学教員の出前授業
- ・課題研究に対する大学生からの指導・助言
- ・大学生等による放課後の学習支援

ウ 地域活動や地域団体との連携

福島県双葉郡教育復興ビジョン推進協議会との連携により、「ふるさと創造学」の学習成果として双葉郡8町村の歴史や文化及び復興の記録を地域や全国、世界へ発信し、地域の復興に資するとともに、地域の活性化・発展につなげる。またその際は地域学校協働本部等を活用する。

- ・地域貢献活動
- ・伝統文化行事
- ・地域学校協働本部

エ 国際機関やNPO等との連携

国際機関やふたばの教育復興応援団*19及びNPO等と連携し、教育活動の充実を図る。

- ・JICA（国際協力機構）
カリキュラム検討の段階から深く連携するとともに、当該機関が主催する各種ワークショップへ参加する。
- ・OECD（経済協力開発機構）
諸外国の先進事例や最新の研究成果を踏まえてカリキュラムについて助言を受ける。
- ・ふたばの教育復興応援団
一線の著名人や企業人を各教科等の授業に講師として招へいする。
- ・認定特定非営利活動法人カタリバ*20
個々に応じた学習のサポート、対話によるキャリア学習のサポート及び探究学習のサポートを行う。

*19 ふたばの教育復興応援団

福島県双葉郡の教育復興を応援しようという各界の有志により平成26年7月に設立された。「前例なき環境には、前例なき教育を」の想いで、学校の取組への協力を行っている。

*20 認定特定非営利活動法人カタリバ

平成13年に設立された教育NPOで、キャリア学習プログラムの「カタリ場」や課題解決型学習プログラムである「マイプロジェクト」等に取り組んでいる。また、宮城県女川町、岩手県大槌町、熊本県益城町に、被災地の放課後学校である「コラボ・スクール」を設置しており、平成29年からはコラボ・スクール「双葉みらいラボ」を設け、ふたば未来学園の授業協力や放課後の学習支援に当たっている。

(3) 学校設定教科の実施及び授業時数の増加

併設中学校においては、学校設定教科を実施するとともに、総合的な学習の時間の授業時数を増やすなど、各学年週3時間（年間105時間）を上限に、授業時数を増やす。

ア グローバル・スタディ科（仮称）

学校設定教科として「グローバル・スタディ科」を全学年で実施する。

イ 国語科・数学科の時数増及びスポーツ科（仮称）の設定

一般選抜で入学した生徒には、国語科・数学科について、それぞれ週1時間程度ずつ時数を増やして実施する。スポーツ選抜で入学した生徒には、学校設定教科として「スポーツ科」を週2時間程度設定する。

ウ 総合的な学習の時間「未来創造学」

総合的な学習の時間「未来創造学」を中学校1学年では20時間増とし、その中でシティズンシップ教育及びグローバル教育を行う上での学びの基盤の確立を図る。

(4) 習熟度別学習

国語、数学、英語において基礎・基本の徹底と個に応じた指導の充実を図るために、習熟度別学習を展開する。少人数による指導により基礎・基本の着実な定着を図るグループと、中高の教員が連携したT Tや相互乗り入れ授業等を行い、発展的な学習を行うグループに分けた展開とする。

中学校の数学の発展的な学習グループにおいては、高等学校における数学の内容も学習させる。高等学校の数学については複数の講座を開設し、先取りをしない生徒や高等学校からの入学生にも対応できるようにする。

(5) 情報活用能力等の育成につながるICT^{*21}の活用

情報を収集、処理、表現するとともに効果的にコミュニケーションを行い、情報社会に積極的に参画するためにICTの効果的な活用を図る。生徒全員がタブレット端末^{*22}を持って授業を受けたり、国内外の生徒とテレビ会議等で交流したりするなど、ICTの特性を生かした教育活動を展開する。情報教育の視点から、「情報活用の実践

*21 ICT (Information and Communication Technology)
コンピュータやインターネットなどの「情報通信技術」の略語である。

*22 タブレット端末
平板型で、キーボードはなくタッチパネルで操作する情報通信機器。

力」、「情報の科学的理解」、「情報社会に参画する態度」の観点にも留意し、教育活動全体で情報活用能力等の育成につなげる。

ア 学びを深めるためのICTの活用

問題解決型の授業や主体的で対話的な学習を促進するために、校内に無線LAN*23を設置するとともに生徒全員にタブレット端末を配付し、学習の場の制約を軽減する。情報を提示しながら自分の考えを効果的に伝えられるような表現力を養うために、電子黒板*24や大型モニタ等を活用する。また、相互に思考を深めるために、タブレット端末を活用して効率的・効果的な意見交換を行わせる。

イ 交流や連携のためのICTの活用

双葉郡の生徒の交流を深め、ふるさとへの意識や連帯感を持続させる教育を実践するために、インターネットを利用して、ふるさとに関する講演会の実施や、連携中学校等との交流授業等を行う。

英語によるコミュニケーション能力の育成や、国際交流を推進するために、インターネットを利用した海外の学校とのリアルタイムの交流や、電子黒板やタブレット等の活用を図る。

生徒会活動においてテレビ会議を活用して他校との交流を行うなど、各種連携においてICTの活用を図る。

(6) 読書活動の充実

豊かな人間性を育むために、中高6年間を通して読書活動を充実させる。双葉郡内の小学校における朝の読書習慣の継続を図るとともに、幅広いジャンルの本を読ませることを重視して、生徒が「じっくりと本に向き合う取組」*25を推進する。

本と生徒をつなぐ「人」が重要であり、図書館ボランティアとしてNPOや地域住民の協力を得るなど、生徒に本を紹介する役割を担う外部人材の活用を図る。

中高一貫校として、中学生から高校生のそれぞれに対応した図書をそろえるとともに、ICTによる検索システムを整えた中高合同で活用できる学校図書館等、読書環境の整備を図る。教科学習で扱った教材内容や、総合的な学習の時間に関連のある本の特

*23 無線LAN

LAN (Local Area Network) とは、施設内程度の規模で用いられるコンピュータネットワークで、無線LANは無線通信を利用してデータの送受信を行うシステムである。

*24 電子黒板

書いた内容を電子的に変換できるホワイトボードである。パソコンの画面を投影できるものもあり、ホワイトボード上でパソコンを操作したり、ホワイトボードに書いた内容をパソコンに保存できたりする。

*25 「じっくりと本に向き合う取組」

双葉郡子供未来会議（平成29年9月2日開催）における子どもの意見を反映させたものである。

集するコーナーを設置するなど、読書指導の在り方や、総合的な学習の時間や全ての教科、特別の教科道徳、特別活動における図書を活用した学びについて、十分に工夫する。

4 中高の接続について

中高の接続について、6年間の区切りの在り方及び中高一貫教育の特質を生かした行事や組織の在り方として次のように整理した。

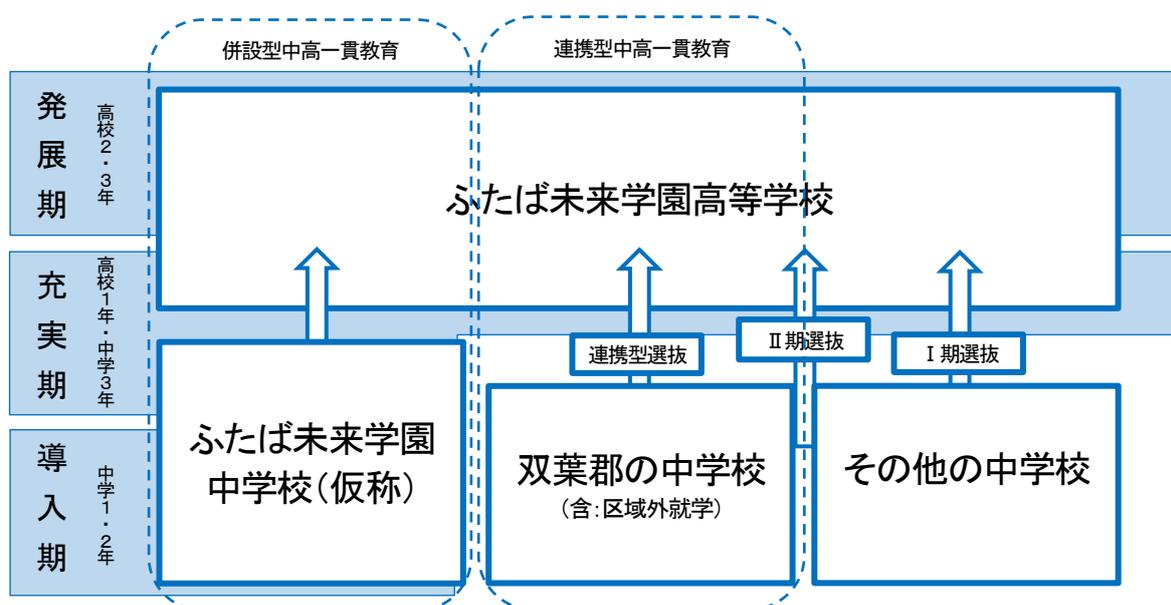
(1) 6年間の区切りの在り方

中学校、高等学校の6年間の区切りを、2つの学年のユニットとして捉え、「導入期」、「充実期」、「発展期」とする。特に、中学3年生と高校1年生に該当する「充実期」においては、中学校と高等学校の学習の効果的な橋渡しについて、中高一貫教育のメリットを最大限に生かす方策の具体的な検討をしていかなければならない。

併設中学校からの進学者と、それ以外の中学校からの入学生の両者が会う高校1年生の教育課程は、実効性の上がるものとなるよう研究を深める必要がある。また、一貫した指導のために、中高で連続した担任教員の配置等を行うことが考えられる。

[取組の具体例]

高校入試がないので、受験勉強に割く時間を有効に活用して、中学3年次の冬期間に修学旅行を計画し、未来創造学やグローバル・スタディ科等による十分な事前学習により学びの充実を図ることや、卒業レポートを課して中学校における学習成果を形にし、その後の自信につなげる取組等が考えられる。



ふたば未来学園中高一貫教育における中高の接続のイメージ

(2) 中高一貫教育の特質を生かした行事や組織の在り方

中高合同の学校行事や、生徒会、部活動等において、中高合同で行うなど、中高一貫校の特質を生かした行事や組織の在り方を、十分に検討する必要がある。

高校入学時においては、多様な人との触れ合いを生かすためにも、併設中学校からの進学者とそれ以外の中学校からの入学生が混在するクラス編成とする。

[取組の具体例]

スポーツにおける中学生と高校生との活動の組み合わせについて、中学3年生と高校1年生と一緒に活動させるのは身体能力の発達等において意味がある。中学校の部活動について、中学3年次の中体連の大会終了後に、早期に高校生と一緒に活動することなどが考えられる。また、「中高の異なる学年が一緒に同じ教室で学習する機会の設定」*26なども考えられる。

5 アスリートの育成について

双葉地区未来創造型リーダー育成構想*27や関係団体との連携を図りながら、全国や世界で活躍するアスリートの育成について次のように整理した。

(1) 育成の方針について

双葉地区未来創造型リーダー育成構想におけるビクトリープログラム*28に基づく、6年間を見通した組織的、継続的な教育を行い、競技者に求められる高度な技能と資質の向上を図り、世界に通用する専門的な技能のみならず、真の国際人として人間性や教養、コミュニケーション能力を身に付けたリーダーを育成する。

アスリートとしての競技力のみならず、レジリエンスを持つとともに、スポーツを通じた地域復興や活性化に貢献していく、真のアスリート育成を目指す。

*26 「中高の異なる学年が一緒に同じ教室で学習する機会の設定」

双葉郡子供未来会議（平成29年9月2日開催）における子どもの意見を反映させたものである。

*27 双葉地区未来創造型リーダー育成構想

「真の国際人として社会をリードする人材の育成」を基本目標として、福島県、双葉郡3町（富岡町、檜葉町、広野町）、JFA等の競技団体等の連携により平成18年度にスタートした人材育成プログラムである「双葉地区教育構想」を継承し、平成29年3月に策定された新たな構想である。「変革者の育成」を教育理念とし、推進体制の枠組みも双葉郡8町村に広げ、ふたば未来学園高等学校を中心に双葉郡内の全ての中学校と連携を図っている。

*28 ビクトリープログラム

双葉地区未来創造型リーダー育成構想のスポーツ分野に関して、中学校・高等学校6年間の一貫した指導により「世界にはばたく人材の育成」を図るためのプログラム。

(2) 基本方針について

6年間を通して育成する種目として、バドミントンとレスリングを設定し、中学生が高校生と一緒に活動する中で、スキルだけでなくメンタル強化も図る。

併設中学校においては、学校設定教科「スポーツ科（仮称）」を設け、種目に関する専門的内容及び生涯を通してのスポーツとの関わりなどを学習させるなど、真のアスリート育成のための教育課程を検討する。

6 生徒募集と入学者選抜について

併設中学校における生徒募集と入学者選抜については、募集区分、募集区域及び出願資格、定員の内訳、入学者選抜の方法について次のように整理した。

(1) 募集区分、募集区域及び出願資格、定員の内訳について

生徒募集に際しては、一般選抜とスポーツ選抜の2つの募集区分を設ける。

一般選抜の募集区域は県内一円とするが、東日本大震災により県外に避難している児童等に対する弾力的運用により、県外からも出願可能とする。なお、一般選抜定員の中に、双葉郡8町村の児童を対象に募集する双葉郡枠を設定する。

スポーツ選抜の募集区域は全国とする。出願資格については、ビクトリープログラム（バドミントン及びレスリング）募集要項による。

定員の内訳については、双葉郡枠を含めた一般選抜の割合は定員の80%程度とし、スポーツ選抜の割合は定員の20%程度とする。

募集区分	募集区域及び出願資格	定員の内訳	募集定員
一般選抜	県内一円の児童を対象とする。 弾力的運用により県外からも出願可能とする。	定員の80%程度	60名 (1学年)
双葉郡枠	双葉郡8町村の児童を対象とする。		
スポーツ選抜	全国の児童を対象とする。	定員の20%程度	

募集区分、募集区域及び出願資格、定員の内訳一覧

(2) 入学者選抜の方法について

一般選抜にあたっては、次のア～エを資料とするのが望ましい。

- ア 適性検査（理解力、思考力、課題を多様な方法で解決する力をみる。）
- イ 作文（考えたことや感じたことなどを文章で表現する力をみる。）
- ウ 面接（学習や諸活動への関心・意欲・態度をみる。）
- エ 調査書（小学校における学習や生活の状況をみる。）

スポーツ選抜にあたっては、従来のビクトリープログラム選考に準じて、次のア～エを資料とするのが望ましい。

- ア 実技審査（各種目に関する適性をみる。）
- イ 作文（「出願を希望する理由」や「将来の夢」など、自分を表現する力をみる。）
- ウ 面接（学習や諸活動への関心・意欲・態度をみる。）
- エ 調査書（小学校における学習や生活の状況をみる。）

7 市町村立中学校等との連携について

併設中学校においては、双葉郡内の町村立中学校とは、「3－（2）連携中学校との連携」でも述べたように、様々な教育活動において連携を進めることが必要である。加えて、いわき市内の中学校で実施している合同生徒会サミットへの参加なども視野に入れた広域的な市町村立中学校との連携も深めていくことが必要となる。併せて、市町村や市町村教育委員会との連携を図る。

また、双葉郡内を始めとした小学校等との連携により、併設中学校への理解を促進し、小学生の進路先としての情報がより円滑に児童や保護者に伝わりやすい素地を形成することが望ましい。

さらに、併設中学校に双葉郡内におけるセンター的な機能を持たせ、町村立小・中学校の教職員との積極的な交流や研修の機会を設けたり、公開授業を実施したりするなどしてそれぞれの指導力の向上を図り、地域全体の学校教育力を高めていくことにも重きを置くとともに、ふたば未来学園中学校・高等学校における活動の状況などについて情報の周知と共有を図る。

（1）双葉郡内の町村立中学校との連携

- ア ふるさと創造学サミット、中高交流会等の様々な機会を通して交流を図る。
- イ 生徒会活動や部活動等の連携や生徒同士の交流を積極的に行わせる。
- ウ インターネット等を活用した交流授業等を積極的に実施する。
- エ 公開授業時には、教職員の積極的な参加を求める。

オ 町村立中学校への出前授業等により、授業力向上に向けた教員研修のセンター的な機能を併設中学校が担うものとする。

(2) 他の公立中学校との連携

- ア 生徒会活動や部活動等の連携や生徒同士の交流を積極的に行わせる。
- イ インターネット等を活用した交流授業等を積極的に実施する。
- ウ 公開授業時には、県内の中学校にも広く案内を送付し、多くの教職員の参加を促す。

(3) 小学校との連携

- ア 双葉郡内の小学校とは、ふるさと創造学サミット等の様々な機会を通して交流を図る。
- イ 公開授業時には、県内の小学校にも広く案内を送付し、多くの教職員の参加を促す。

8 教職員の組織マネジメントについて

中高一貫教育で目指している「地域や世界で活躍するリーダーの育成」の具現化に向けては、教職員の適正な配置や組織マネジメントは重要である。

(1) 教職員の配置等について

教職員の配置については、「4 中高の接続について」における2年間の区切りや中3と高1の接続について配慮することも踏まえ、高校籍、義務籍の教職員を適正に配置することにする。なお、習熟度別学習や授業時数増加等への取組に向けて、教職員の適切な加配、新たな職（副校長・主幹教諭）の配置等の対応が必要である。

(2) 教職員の指導力の向上について

教職員の指導力を高めるために、常に多くの研修の場と機会を確保することが必要となる。そのためにも、旅費等の予算確保についても、配慮すべきである。

研修についてその具体的な内容等は、併設中学校がセンター的な機能を有することや他との連携の趣旨から、対外的に示し公表することも重要である。